マン兄弟の確執 ── 1903～05年 ──
（その 4）

三　浦　淳

Ⅶ．確執の顕在化 ── トーマスのハインリヒ批判

『愛の狩猟』が出版された直後の1903年12月5日，トーマスはハインリヒに宛てて長い手紙を書き送った。ここでトーマスは真っ向から兄に対する批判を展開している。

先にも書いたように，この書簡はその存在自体は推測されながら長い間実物が未発見のままであった。1981年になってようやく発見され，いったん雑誌に発表されたのち，1984年に出た『マン兄弟往復書簡集』新版に収録された。

日本では1970年代前半に新潮社から邦訳の『トーマス・マン全集』が出て，中の一巻が書簡集に当てられているが，問題の書簡は邦訳全集出版後に発見されたため，その重要性にもかかわらず邦訳がない状態が続いている。またこの書簡の便箋の裏側には，ハインリヒが返信用に認めた下書きが残されており，この時期ハインリヒがトーマスに宛てた書簡は全部が失われてしまっているため，非常に貴重な資料となっている。

そこで，問題の書簡とその裏に書かれたハインリヒの返信用下書きとを本論考の付録として訳出することにした。枚数制限の関係でトーマスの書簡は前回の連載第3回に，ハインリヒの返信用下書きは今回の連載第4回にそれぞれ訳出されている。読者はあらかじめ付録の書簡訳文に目を通した上で，以下の論考をお読みいただきたい。

1903年12月5日付の長大な書簡で，トーマスはいったい何を言おうとしたのだろうか。内容を要約するなら次の三点になろう。

第一に，自分の近況報告である。『ブッデンブローク家の人々』が一万一千部を突破したこと，出版主から作品をほめられたこと，執筆注文が相次いでいること，小説ばかりか劇場支配人からは劇作品を求められたこと，しかしそう

した成功は自分の精神状態に見合っていないこと。

第二に兄の『愛の狩猟』に対する根底的な批判，そしてさらに兄の芸術家としてのあり方に対する疑問である。作品批判では言葉遣いや技法上の問題について細かく自分の意見を述べており，また異常なまでの執筆の速さをとがめている。そしてエロスとは何かといった認識上の問題にまで言及している。それにとどまらず，《この本の題名はむしろ『効果の狩猟』とでもすべきでしょう》《あなたは最近効果と成功のことを口にし過ぎます》という具合いに，一種の動機の不純さとでも言うべきものを相手の態度の中に嗅ぎ付け，さらにそれを《いや，私だって分かっています。『ブッデンブローク家の人々』の成功が兄さんの目をくらましたのではなく――そんな風に思うのは莫迦げていますし笑止千万です》と自分の作家的成功を（否定しながらではあるが）対比させている。

第三に，自分のアイデアであるモチーフや表現をハインリヒが盗用していると非難している。

以上の三点は実は互いに切り離せない関連性を持った問題なのであるが，とりあえず個々の点についてやや詳しく見ておこう。

第一の近況報告であるが，まず作家としての成功をかなりはっきり書き記している点に注目したい。『ブッデンブローク家の人々』が一万部を突破したというのは，ハインリヒにとっては驚きだったに違いない。『ブッデンブローク家の人々』は1901年にフィッシャー書店から二巻本で発売されたが，当初は売行きが芳しくなかった。しかし1903年初めに一巻本の廉価版が発売されてこれが好評を博したのである。また1903年春にトーマス・マンは，1898年の第一短篇集『小フリーデマン氏』に続く第二短篇集『トリスタン』を出している。

ハインリヒにしても，出した本の数で言えば作家としての業績で劣っていた訳ではない。第一長篇『或る家庭にて』は母から書店に金を出してもらっての出版だから除くとしても，『逸楽境にて』と『女神たち』三部作という二つの長篇小説の作家であり，また1900年以前に書かれた初期短篇も二冊の短篇集にまとめられていた。(1) しかしそれらはいずれも売行きという点ではぱっとしなかった。『逸楽境にて』は初版二千部はすぐに売り切れたものの第二刷になると売れなくなったし，(2)『女神たち』も当初二千部が刷られたものの売行きは芳しくなかった（初版の五年後，1907年に廉価版が出たがやはり余り売れなかっ

た)。[3] これと比較してみると，弟の処女長篇が一万部を突破したというのは大変な成果だと分かるだろう。

しかし，この書簡からそうした成功譚だけを読み取るのでは片手落ちと言うべきだろう。自作長篇の成功は誤解からだとか，作品に満足しない時に限って世間から賞讃されるとかいう文面は，単に成功をあからさまにひけらかすのを避けるための謙遜とは思われない。確かにトーマスは世間的な成功を収めながらも心が晴れない状態にあったのだ。『トーニオ・クレーガー』に表現されたような問題意識と孤独感が重くのしかかっていたからだった。恐らくそれは，最終的にはカチア・プリングスハイムとの結婚という形でしか解決されないような煩悶であったろう。

なお，一部ハインリヒ側に立つ研究者はトーマスがここで無神経に自慢話をしていると決めつけているが，[4] 作家としての仕事を互いに報告しあうのが以前から二人の習慣になっていたことはそれまでのトーマスの兄宛て書簡から容易に見てとれるのであり，たまたま成功したから相手にひけらかしたのだとする見方は的はずれである。

第二点に行こう。『愛の狩猟』への批判である。まず執筆の猛スピードに触れている点に着目したい。

ハインリヒ・マンは実際，この『愛の狩猟』を恐るべき速さで書き上げた。彼の Karl Lemke 宛書簡[5] によれば，1903年1月にガルダ湖畔で構想を練り，2月には執筆を開始し，途中短篇『ピッポ・スパーノ』で中断があったが，同年の夏に完成したという。わずか半年で仕上げたことになる。

これをトーマスの『ブッデンブローク家の人々』と比較してみるとその速筆ぶりはいっそう明瞭になろう。トーマスのこの処女長篇は『愛の狩猟』の二倍弱の長さであるが，執筆開始から完成まで三年近くを要している。ハインリヒは『愛の狩猟』を弟の『ブッデンブローク家の人々』の三倍の速さで書き上げたことになる。もともと弟に比べて筆の速い彼ではあるが，それにしてもこのスピードは少し異常と言わなくてはならない。それも準備期間が長いならともかく，構想から執筆開始までわずか一ヶ月しかかけていない。前作の長篇三部作『女神たち』を終えてから余りたっていない時期だ。もう一つ比較をするなら，この『女神たち』は『ブッデンブローク家の人々』と同じくらいの長さだが，執筆には二年近くを要している。『愛の狩猟』は前作『女神たち』と比べ

ても倍の速さで書かれたのである。何が彼をしてこうした言わば執筆過多へと誘ったのだろうか。

そこには恐らく二つの理由があった。外在的理由と内在的理由である。

外在的理由から行こう。それは上記書簡に否定する形ながら暗示的に書かれているように，弟トーマスの作家としての成功である。『ブッデンブローク家の人々』が『愛の狩猟』出版直後に一万部を突破したことは上で述べた通りだが，約八ヶ月前の1903年３月時点でもすでに五千部に達していた。(6) ハインリヒの作品は『逸楽境にて』が二千部そこそこ，『女神たち』は初版二千部が売れ残っている有様であったから，『愛の狩猟』執筆開始後間もない段階でトーマスの処女長篇がハインリヒの二長篇を凌ぐ大きな成功を収めた事実が明白になっていた訳である。もともとトーマスより四歳年長でそれまで万事にわたって弟の文学的先導者であったハインリヒにしてみれば，兄としての優越性がおびやかされるような不安感が生じたとしても不思議はない。しゃにむに新作長篇を書き上げたハインリヒが，処女長篇の廉価版によって上がりつつあった弟の名声を意識していた可能性は高い。兄弟作家というのは微妙な関係にあるものだ。二人とも無名で世間に認められる以前なら，将来への野望を語り合いながら励まし合い切磋琢磨することもできる。しかしそうした状態がいつまでも続くとは限らない。一方のみが名声を得る時，均衡状態は崩れてしまう。有名な例としてはフランス・ロマン派の巨匠ヴィクトル・ユゴーが挙げられよう。アカデミー・フランセーズの詩のコンクールに応募し十五歳という異例の若さで選外佳作を得た彼は，同じように文学少年だった二歳年上の兄ウジェーヌに衝撃を与え，さらに五年後，兄も恋をしていた女性アデールを妻に得ることで，兄を発狂へと追いやったのだった。(7)

またマン兄弟の関係の変化は，四歳という年齢差の持つ意味が，年とともに変わってくるという事情にもよるだろう。一方が二十歳で他方が十六歳なら四年という年齢差は大きい。しかし一方が三十歳で他方が二十六歳となると話は別で，その頃になると年齢差による精神的な優位は，なくならないまでも相当縮小せざるを得ない。本論の連載第２回でトーマスが書評や『トーニオ・クレーガー』で暗に兄のルネッサンス崇拝を批判したことに触れたが，それが1902年から1903年初め頃に起こっているのは偶然ではない。トーマスはその時二十七歳であり，従来は兄の姿を追いながら文学の道を進んできたものが，ちょうど

親離れならぬ兄離れを起こす時期にさしかかっていたのである。[8] 離れられる兄の方は，自分がすでに十分な文学的名声を得ているならさほどの痛痒も感じないだろうが，そうでないとなると内心穏やかならぬ状態に陥らざるを得ない。

しかしハインリヒの異常な速筆が弟への対抗意識からのみ起こったとするのは浅薄な見方であろう。外在的理由以外に内在的必然性があったのだ。この時期，彼はそもそも作家としての転換期にさしかかっていたのだった。簡単に言ってしまうと，『逸楽境にて』『女神たち』と続いた芸術家時代の終焉である。しっかりとした構成を持った長篇小説を時間をかけて構想しじっくりと書き上げること，これが彼にはできなくなりつつあったのである。そこには無論，先行する二長篇が思ったような成功を収められなかったという事情が影を落としている。一定の成功を収めて世間から「彼はこういう作家だ」というイメージをもって見られるなら，作家は腰を落ち着けて仕事をすることができる。仮に作風を一変させるにせよ，先行する作品群が周囲から安定した評価を受けていれば，それを言わば一方のおもりとして，十分な成算のもとに別方向に思い切った冒険に乗り出すことも容易になる。ハインリヒはしかしそうした境遇にはなかった。

作家としての地位が不安定である場合，対処の仕方には二通りある。書くのをやめるか，逆に書きまくるかだ。ハインリヒのとったのは明らかに後者の道だった。トーマスの長い手紙に対するハインリヒの返信用下書きには興味深い記述が見られる。

《あの本では〔クロードとウーテ以外の〕他のものには何も興味がない。他のものはすべて事件の羅列であり，おふざけであり，荒っぽく，汚らしく，半ばだけ現実であり，まったく不十分だ。クロードはこうした出来事で自分の感情をすり減らす。彼は私がそれらを見ているのと同じように見ている。》

《実際のところはただ，私が事件を綴る者 Croniqueur だということだ。》

《むしろ私に欠けているのは安らぎであり，推敲のための時間だ。
私は不安なのだ。やめたら，自分はおしまいなのだと。》

こうした記述は，作家としての地位も定まらず不安を抱えたままひたすら執筆を続ける男の姿を伝えてはいないだろうか。年齢はすでに三十二歳，若いと言うには躊躇があり，十代から文学を志した人間としては成果の如何が問われ

る時期である。その意味で《私は不安なのだ》は実に正直な告白と言うべきだろう。

もう一つ注目したいのは，彼自身によって抹消された箇所ではあるが，《実際のところはただ，私が事件を綴る者だということだ（Tatsache ist nur, dass ich ein Croniqueur bin.)》という記述である。Croniqueur はフランス語の chroniqueur のことで，年代記作者の意と新聞の時評記者の意とがある。恐らくハインリヒ・マンは，素材を自分流に料理して作品全体に有機的に溶け合うような形で組み込むのではなく，何でも起こった事件や見聞した事柄を闇雲に作中に取り入れてしまう自分の執筆法を表わすのにこの単語を用いたのだろう。こうした性向は『愛の狩猟』で初めて表に出てきた訳ではない。前作『女神たち』もそうであった。ただそこでは異国絵巻物風の雰囲気が，盲滅法取り入れられた素材にそれなりの輝きを与えていて，構成の不備という印象を与えなかったのである。同じ方法が今度は作品の不出来を招来し，弟や書評子に批判される結果を生む。ハインリヒ・マンは自分のこの chroniqueur 的性質に一生涯つきまとわれたと言ってよい。それをどう制御するかが彼の作家としての課題であり続けた。その意味で，『愛の狩猟』での chroniqueur 的要素の噴出は，作家としての地位への不安感やあせり故にかなり極端な形で現れてはいるものの，彼本来の素質が顕在化したと見るべきで，決して一時的な迷いや逸脱と解釈すべきではない。ここで初めて彼の作家としての本質が正面から問われたのだった。

実はここに第三の問題を解く鍵もひそんでいる。トーマスは自分が考案した表現やモチーフを盗用したとしてハインリヒを非難した。しかし恐らくハインリヒとしては，弟のアイデアを借用したという意識は希薄だったのではないか。chroniqueur たる彼はたまたま目についた表現やモチーフを，読み捨てた新聞記事や小耳に挟んだ風聞を取り入れるのと同じ感覚で使ったということなのではないか。無論そうではあってもトーマスの側からすれば捨ててはおけないという話になるだろうが，この問題は二人の創作方法の違い，ひいては作家としての根本的な気質の違いが，表現やモチーフの独自性に拘泥するかしないかという点で齟齬を来したのだと言えるだろう。

さて，また第二の問題に戻ろう。

トーマスの『愛の狩猟』批判は執筆の速さに向けられていただけではない。

文章表現や小説の技法，そしてそもそもの作家としての態度にも向けられていた。これは最も本質的な問題を同業者，それも四歳年下の弟が兄に指摘するということであるだけに，ハインリヒにとっては文字通り逆鱗に触れる部分であったろう。文章表現や技法についてはトーマスの書簡を読めば分かることなので，ここでは作家としての態度に言及している部分を見てみよう。

まず効果狙いが目立つことを槍玉に挙げる。

《この本の題名はむしろ『効果の狩猟』とでもすべきでしょう。(…) 私の意見では，あなたを堕落させているのは ── 堕落という表現を使わしてもらうとすればですが ── 効果への渇望です。あなたは最近効果と成功のことを口にし過ぎます。(…) 私が『大公殿下』について話すと，あなたが何より強調したのは，題名がショウウインドーの中で目立つだろうということでした。あの時まで私は，別段聖人ぶろうというのではありませんが，「ショウウインドー」にまでは考えが及んでいなかったのです。お前はドイツ民衆の感性に近いところに立っているのに対し，俺は「センセーションでもってそうしなくてはならない」，あなたは我々二人の違いをそう図式化したのでした。……「そうする」とは一体何ですか！　誰が一体「そうする」というのでしょうか！》

ここから分かるのは，先にも述べたように，『ブッデンブローク家の人々』の成功が二人の関係に，そしてハインリヒの態度に影を落としているという事実である。或いは，少なくともトーマスの側からはそう見えたということだ。これに対してハインリヒはどう答えようとしたか。

《私が効果について語っている時は，もっぱら金のことを考えている。喝采を浴びることそれ自体を問題にするような，虚栄心で一杯の連中を莫迦にする十全な権利が私にはあると言いたい。私にとっては，沢山の人間の出す不特定な喧噪は背後にある，(…) どうでもいい。名声なるものは私に関するあまねく広まった誤解だということは，分かりすぎるくらい分かっている。誰に対してか知らないままに人が拍手をするということも。クロードとマットハッカーがこの点について言っていること，私は本気でそれを書いたのだ！　私は自分が一人だということを知っている》

まず，効果と言ったのは金の問題だと答えている。金銭問題は実は第一次大戦時にも兄弟の関係に微妙な影響を及ぼしており，文学が綺麗事では済まない

事情を端的に物語っているかのようであるが,[9] この時期に話を限るなら，兄弟は父の遺産から一定の取り分を母に定期的に送金してもらっていた。普通に暮らしていれば生活に不自由しない程度の額であったが，ハインリヒのようにしょっちゅう旅行したり贅沢をしようとするならそれだけでは不足する。作家として名が売れ原稿料が十分に入ってくればいいのだが，上述のように彼の本の売行きは振わなかった。この頃『ブッデンブローク家の人々』の印税で裕福になったトーマスは兄や友人に少なからぬ額を用立てている。[10]

次に，成功とは誤解だというのは『愛の狩猟』でクロードがシュピースルに言う台詞だが,[11] トーマスが問題の書簡の中で『ブッデンブローク家の人々』の良好な売行きについて《成功とは誤解です》とコメントした時，兄の作中の台詞を用いていた訳である。そしてそれに対しハインリヒも同じ台詞で応じたのだった。これはまた，上述の通り，大衆を軽蔑しながらも大衆の喝采を求めるヒロイン・ウーテの矛盾が描かれていることとも関連する。ハインリヒは一年後の1904年12月に友人 Ewers 宛て書簡で，『愛の狩猟』に絡めて，自分は大衆に受けるタイプではなく少数の愛好家向けの作家だと言っているが,[12] これはトーマスに対する回答をさらに定式化したものと言えよう。

しかし，ハインリヒが成功を望んでいなかったというのは考えられないことだ。ウーテの矛盾を矛盾と見抜く目と，だから成功を欲しないというのとは全く別の話である。《効果と成功のことを口にし過ぎる》というトーマスの指摘が当を得ていたかどうかはともかく，本当に世間的な成功に無頓着なのなら，弟が何を言ってこようと泰然自若としていられた筈だ。実際には彼は成功を欲していたのだが，それが得られないままに弟の成功を目の当たりにし，弟と自分の作家としての姿勢を峻別する必要に迫られて《少数の愛好家向けの作家》と言ってみたと考えるべきだろう。

問題の書簡に先立つこと三年前，兄に宛てた現存する最初の書簡（1900年10月24日付）の中でトーマスはこう書いた。

> 《これはお祝いの手紙です。本当に成功を収めるのは可能なのですね。私には第二刷（…）などということはあり得ないでしょうが，想像するだけでも勇気がわいてきます。知らせを聞いて，本当に一種のショックを受けました。十日ないし二週間で〔初版の〕二千部が売れたとは！　心からおめでとうと言います。そして売行きがさらに伸びることを祈っていま

す。》[13]

ハインリヒの『逸楽境にて』の初版二千部がすぐに売り切れ第二刷が決定したという知らせに接して，トーマスはこんなお祝いを書いたのだった。《私には第二刷などはあり得ないでしょう》と書いているのは，数カ月前に『ブッデンブローク家の人々』を脱稿してフィッシャー書店に送ったものの，出版されるかどうかなかなか決まらず，通知をじりじりしながら待っていた時分だったからである。『逸楽境にて』の売行きが第二刷に入ると止まり，『ブッデンブローク家の人々』が廉価版によって急速に売行きを伸ばしていった事情はすでに述べた通りだが，そうした帰趨が定まらない頃にはトーマスは或る意味で屈託のない手紙を書くことができたのである。ハインリヒ側の手紙は残っていないが，どんな文面であったかはトーマスのこの返信からも想像がつくではないか。

ともあれ，もともと作家としての転換期にさしかかっていたハインリヒは，1903年末に弟から受け取った長い手紙によって，自分をどう位置づけるかという問題と否応なく向かい合わざるを得なくなった。しかし，トーマスの側も作家としての成功にもかかわらず鬱々とした日々を送っていた。兄にきつい内容の手紙を送ったのは，或る意味で自分自身の危機意識の反映だったのである。兄弟はこの時期，それぞれに違った，しかしまた表裏一体の関係で，重大な転換期に直面していた。その危機を，トーマスがカチア・プリングスハイムとの結婚によってひとまず解決するまでの過程を次に検討しよう。そして，この結婚自体がまた兄弟の関係に小さからぬ影響を及ぼしたらしい事実を検証していこう。

Ⅷ．トーマス・マンの結婚

兄に長大な批判的書簡を送ってから14カ月後の1905年２月，トーマス・マンはカチア・プリングスハイムと結婚した。この結婚は『愛の狩猟』を契機とする兄への批判と並んで，マン兄弟の関係を決定づける転回点となったと考えられる。以下，この結婚をいくつかの観点から検討してみたい。

（1）　結婚までのトーマスの兄への態度

最初に，結婚までの兄弟の関係を，主に書簡を通してトーマスの側から見てみよう。ハインリヒ側からの検討は後で改めて行う。

トーマスはハインリヒに1903年12月５日に長大な批判的書簡を送ったが，兄と最終的に決裂してしまう意志はなかったようだ。ハインリヒの返信に対し，同じ月の23日に短い手紙を書き送っている。(1) 兄弟は仲良くするのが一番という，言わばとりあえずの和解の申し出であった。「フライシュタット」誌に暗に兄をあてこするような書評を載せたことも認めている（本論III参照）。

これに対してハインリヒの側はさらに和解の申し出を不真面目とする返信を送ったらしい。翌1904年１月８日付のトーマスの書簡はさらに相手をなだめようと弁解に努めながら，しかし同時に控え目に反論をも試みている。そして自作の短篇二篇を送っている。

この１月８日付書簡を簡単に見ておこう。(2)

まず先日の手紙は最上のものとは言えなかった，自分の表現力はつたないし手紙に時間をかけすぎると他の仕事ができなくなってしまうから，と弁明をしている。次に，しかしあなたの返事を読んで自分も憤激を感じた，以前母や弟に対する無責任な態度を批判されたことがあったが，それ以前にはあなただって私に家族を任せきりでイタリアで美術見物をしていたではないか，と昔のことを持ち出している。

それから『ブッデンブローク家の人々』でクリスティアンのモデルになったフリードリヒ叔父から俺をモデルに使ってけしからんという手紙をもらったことを例に，小説中では叔父を滑稽に描いたかも知れないがそれは叔父への愛情の表現であったのと同様に，たとえ誰かについて批判的に述べようともそれは相手への真摯な関心の表われなのだと説明する。また，最近自分をこきおろした評論を読んだことを例に，批判をいちいち真面目に受け取っていたら身が持たないと述べる。

次に「あらゆる人畜無害な関係を放棄する！」という兄の返信の文句に触れて，純粋な芸術家になるのはあなたには向いていないように思う，芸術家になるにはあなたは高貴すぎる，と前年の長大なハインリヒ批判の手紙でも述べたことを繰り返している。そして自分もレーア夫妻（上の妹ユーリアとその夫）もあなたのことをいつも気にしていると，兄の孤立への志向を戒めている。

以上，全体として自分の主張をしながらも相手をなだめようとする姿勢が明瞭に現れた書簡である。逆に言うと，内容面での目新しさは感じられない。

次の書簡は約50日後の1904年２月27日付[3]である。最初に，送られてきた兄の短篇小説２編に関して面白いことを言っているのだが，これについては後でこの時期のハインリヒを扱う際に言及するとして，後半でカチア・プリングスハイムと知り合ったことを初めて報告している点に注目したい。彼女についての報告はこの書簡の中でもかなり長い部分を占めており，カチアに熱を上げている様子が端的に見てとれる。トーマスがカチアと知り合いになったのは1904年の２月初めと推測されているので，彼はかなり早い時期から兄に意中の人を打ち明けたことになる。

また『ブッデンブローク家の人々』が１万８千部に達したこと，（ハインリヒの小説の出版社である）ランゲン書店の店主に会う機会があったので兄の本を引き続きよろしく頼むと言っておいたことを報告している。

その次の書簡はちょうど１カ月後の３月27日付であるが，[4]兄の誕生日に簡単にお祝いを述べた後，カチアとの結婚を真剣に考えていると述べている。余り長い書簡ではない。

さて，ここまでは兄弟の手紙のやり取りは問題の1903年12月５日付のトーマスの書簡以来途切れることなく続いていた。ところがここでしばらく手紙の往復は途絶えたと見られるのである。トーマスの次の兄宛の書簡は，９カ月後の1904年12月23日付までない。[5]この間隙は少々考えさせるものを含んでいる。無論，先に問題にした1903年12月５日付書簡にしても出されてから約80年後に発見されたのだから，この９カ月の間にハインリヒへの手紙が書かれていながら紛失してしまった可能性もないとは言えない。Mendelssohn は数通の手紙がこの間に書かれたのではないかと推測して，1904年12月23日付書簡の調子は変わらず心が籠っているからと述べている。[6]しかし私はこの見解には異論がある。この書簡の冒頭でトーマスは，最近多事多端で手紙を書くのが容易ではないと述べているからだ。これは久闊を叙す文句だろう。またこの手紙の末尾で，兄弟の知人である医師フォン・ハルトゥンゲン博士によろしくと書いて，《博士<u>にも</u>長いこと手紙を差し上げておりませんので》（下線は引用者）と述べているのは，ハインリヒ宛書簡も久しぶりであることを裏付けるものではないか。つまり兄弟は，９カ月間そっくりかどうかは別にして，少なくとも数カ

月は音信がなかったと考えていいのではないだろうか。ただし3月27日付の手紙では4月と5月に会える可能性がありそうだと言われているし，トーマスは実際4月半ば頃から5月初めにかけてハインリヒが滞在していたイタリアの保養地リヴァに出かけているので，そこでハインリヒと会って直接話をした可能性は高いと思われる。しかし，恐らくそれ以降，1904年12月23日付書簡までは兄弟は疎遠になっていたと見ていいだろう。

この推測を裏付ける資料はもう一つある。1904年11月に母ユーリアがハインリヒに宛てた書簡である。この書簡については後で詳細な検討を加えるが，ここから，ハインリヒがこの年の初秋に書いたエッセイを母には送りながら弟トーマスやレーア夫妻には送っていなかったことが分かる。(7) 先に述べた通り2月にはまだハインリヒは自作小説を弟に送付していたのだから，1904年の半ば以降の兄弟間の意志疎通はそれ以前に比べて悪化していたと見るべきではないか。

その理由は言うまでもなく，トーマスとカチアの結婚問題であった。もっとも，カチアの心を得ようと必死になっているトーマスには兄との件に時間をさく余裕がなかったということでは，必ずしもない。『トーマス・マン書簡要約索引集』を見ると，(8) 1904年のトーマス・マンはカチアへの手紙をせっせと出すにとどまらず，友人のクルト・マルテンスやイーダ・ボイーエトなどに少なからぬ手紙を書いている。マルテンスへはカチアとの話の進展状況を報告もしている。確かに頭がカチアのことで一杯でなかなか他事に頭が回らなかったとは言えるかも知れないが，少なくとも兄に手紙一本書く余裕すらなかったとは考えられない。とすると，音信が途絶えたのには別の理由があると見なければならない。

先に述べた通りトーマスはこの年の4月半ば頃から5月初めにかけて保養地リヴァに出かけている。彼がそこで兄に会っている可能性は高いが，その時何があったのかは現存する書簡などからは直接うかがうことはできない。またMendelssohnの詳細な伝記もリヴァ滞在中の兄弟の関係には何も触れていない。(9) したがってこの点は実証的な証拠なしの推論にならざるを得ないのであるが，私は同年8月19日にトーマスが女友達イーダ・ボイーエトに書いた手紙に注目したいと思う。この前後の現存するトーマスの書簡がカチアに関するものか，或いは仕事に関わる事務的なものがほとんどである中で，これは例外的に兄と自分との関係に言及しているからである。この書簡は『女神たち』に対

するトーマスの批判について述べた本論IIIですでに引用しているが，ここでは兄弟の関係が1903年12月5日のトーマスの書簡以来微妙になっていることを念頭において，改めて見ておきたい。

この中で彼は，おのれに真摯な関心を抱く者こそが真の作家なのだと述べて，自己認識より美に関心を抱くような作家たちにはこの種の気質（Ethos）が欠けているが兄もその一人だと述べて，次のように続ける。

《私が兄と関心が重なり合うとお思いでしたか？　兄の最新作〔『愛の狩猟』〕のせいで私たちは危うく不和になるところでした。にもかかわらず，兄の芸術家としての性格を見て私が感じるのは軽蔑などではなく，憎悪なのです。彼の書く作品は劣悪ですが，その劣悪さが異常なほどなので，向きになっても敵対せずにはいられないのです。あの好色性の退屈な破廉恥さや，精神も心も籠らぬまま女体に触れまくる官能性のことを言っているのではありません。私を憤激させるのは，彼の描く美に備わっている，墓場から吹いてくる風のような冷たさです。この冷たさには，ホフマンスタールの『エレクトラ』に感じるのと同じ嫌悪感を覚えずにはいられません。こういう連中の芸術はこうるさいだけで強さがありません。心に残るようなものは何もないのに恐ろしく気に触るのです。……でも，私もそんな作家の一人に数えられているのをご存じですか。私は「冷たい芸術家」だと，雑誌に一度ならず書かれました。私は過度に芸術を崇めているのでまともな感覚や生き生きした人生へのつながりを失っているのだそうです。……真面目な話，本当にそうだったらいいと思います。そうだったならせっせと仕事ができるでしょうし，「人生」やその他諸々の感情の冒険によって創作を邪魔されることもなくなるでしょう。（…）しかし何はともあれ，兄と私の間には，深い対立関係にも関わらず親縁性があります。兄弟たることから来る，一種の血縁的な類似性があるのです。この点は忘れないでいただきたい。芸術と生の二元論的な矛盾は私にも兄にも同じように存在するのです――ただ，この矛盾が私にはまだ真剣に取り組むべき問題であるのに対し，兄にあってはもはやそうではないということです。兄は選んでしまったのです。芸術を。兄が芸術家の道を選んでおのれを強いと感じるようになっていることは疑い得ません。『アッシィ公爵夫人』を書いていて或る箇所で涙を流したと，兄自身の口から聞いたことがあります

が――私は無条件にこれを信じます。兄は兄なりの意味で芸術家なのです，確かに。あなたも兄の成長を見守っていかなくてはいけません。》[10]

内容的には特に新味がある訳ではない。『女神たち』以降のハインリヒに対する批判的な見解がここでも繰り返されているだけとも言える。しかしまさにその新味のなさと，この書簡が1904年８月に書かれている点に注意を払いたいのである。同年４月から５月にかけてトーマスはハインリヒと会った可能性が高い。もしその時に兄弟の関係に重大な何かが起こっていたなら，トーマスは上記のような手紙を女友達に書き送ることはなかったのではないか。重大な何かとは，前年12月の書簡以来関係がぎくしゃくしていた兄弟が心からの和解を果たすか，或いは逆に完全に決裂するか，である。仮にそのいずれかが起こっていたなら，トーマスはボイーエトやマルテンスらの友人へ宛てた書簡でこの点について何がしかの記述をしていたのではなかろうか。

トーマスが例のハインリヒ批判の手紙を送って以来初めて兄と顔を会わせた時，恐らく二人の間には激しい口論などは起こらなかっただろう。むしろ二人は一種のよそよそしさをもって再会したのではないか。そこには，決裂もない代わりに真の和解もなかった。かつては単に兄弟関係だけではなく，文学を志す若者同士という関係が二人を結びつけていた。しかし弟が『ブッデンブローク家の人々』で成功を収め，兄の『愛の狩猟』を正面きって批判し，意中の女性を見つけて結婚を目指している今，二人がかつてのような関係に戻れるはずもなかった。弟の方としては，カチアのことで手一杯な現状では兄との関係は悪化しない程度にとどめておこうとの計算もあったかも知れない。ハインリヒにしても兄としてのプライドがあり，書簡で述べられたトーマスの見解を全面的に認め相手に歩み寄ることはできなかっただろう。1904年春の二人の再会は，こうして別の道を歩み出すことになったお互いの状況を確認するに終わったのではなかろうか。だからこそ，以後同年の末までトーマスは兄に書簡を送らなかったと私は考えたいのである。

可能性はもう一つ考えられる。1904年春にリヴァで兄弟が会わなかった場合だ。トーマスがこの時期リヴァに行ったことは書簡などから確実なので，もし同じ頃ハインリヒがこの地にいなかったとすると（彼はトーマスと違い旅行がちで，しかも書簡などが余り公刊されていないため，いつどの場所に滞在していたかは弟ほど判然としていない），それは兄が意図的に弟と顔を会わすまい

としたためだととらねばならない。結果として以後半年間兄弟の音信が途絶えたとしても不思議はない。

さて，そこで1904年12月に，カチアとの結婚を約２ヶ月半後に控えたトーマスが，恐らく９カ月ぶりで兄に送ったと思われる書簡を見ておこう。

まず結婚問題にかかずらい過ぎて兄への関心がおろそかになったと思わないで欲しいと書いて，「幸福」は決して軽快で明朗なものではなく，様々な労苦を伴うものであり，むしろ自分はそれを一種の義務感をもって引き受けたのだと述べている。それから今年のクリスマスにあなたがミュンヘンに来ないのは残念だと述べ，結婚式には是非来てもらいたい，カチアの家族にもあなたを紹介したい，前もってカチアにあなたの方から手紙を出してやってくれないか，と念入りに頼んでいる。

この手紙の調子は全体として非常に丁重で，相手の意向を慎重にうかがう姿勢を示している。

弟からこのように丁重に頼まれたハインリヒは，しかしトーマスの結婚式には出席しなかった。二人の妹のうち下のカルラも欠席した。

結婚式の１週間後，1905年２月18日，トーマスは新婚旅行先のホテルから兄に手紙を書いている。調子は先の手紙と同じく非常に丁重であり，兄が結婚式に来なかったことにいささかも批判めいた物言いはせず，式に欠席したハインリヒとカルラが共同で贈物をしてくれたことに感謝してこう述べている。

《妻と（こう書くのは悪くない気分です）私に，カルラと共同で素晴らしい記念品を送っていただきありがとうございました。兄さん自身はまだ品物の実物をご存じないのでしたね。でも拙宅にいらっしゃればすぐご覧になれますし，あらかじめ言っておくと非常に立派な品ですよ。趣味がよく，しかも実用的で，ティーアガルテン通りからの豪勢な品より嬉しく思います。両方とも並んでテーブルに載っていますが。》(11)

ティーアガルテン通りというのはベルリンの地名で，カチアの叔母エルゼがそこに住んでいた。叔母は銀行家と結婚していて裕福であったが，トーマスは兄と妹の贈ってくれた品がエルゼ叔母の贈物にもまして嬉しかったと，ハインリヒを立てる言い方をしているのである。トーマスの長女エーリカは，彼女自身子供時代にエルゼ大叔母宅を何度も訪れたことがあり，その暮しぶりの豊かさを書き残しているが，父のこの手紙について次のように述べている。

《ティーアガルテン通りからの贈物は決して成金趣味の品などではなく，銀製のティーセットであり，今日でも私たちの家で使っている。しかしトーマス・マンは裕福な家の娘と結婚したことをハインリヒに対して恥じる気持ちがあったので，ここから来た贈物をけなす傾向があった。》(12)

確かにそうも言えるのかも知れない。しかしむしろここでは，トーマス・マンが終始自己主張を押さえ，ひたすら兄の立場を気遣いつつ，兄に他の家族（母や弟妹，カチアの家族）との和をなるべく損なわせまいとしている姿勢を読み取るべきではないか。恐らく母ユーリアからも要請があったのだろうが，1904年12月の兄への手紙で述べていたこと，すなわち幸福は決して軽快で明朗なものではなく，様々な労苦を伴うものであり，むしろ自分はそれを一種の義務感をもって引き受けたのだということ，それをまさにトーマスは兄への気配りによって身をもって示しているのだ。多分トーマスはカチアと知り合い婚約にこぎ着けるまでの様々な経験や人間関係での苦労から，幸福とはそうした義務を果たすことの別名なのだという認識を実地に体得していったのだろう。また，カチアへの求婚を通してプリングスハイム家とつき合うことで，逆にマン家の家族を大切にしなければという一種のバランス感覚が生まれたとも考えられる。数年前に出たトーマスの次男ゴーロ・マンの自伝によれば，トーマスは必ずしもカチア夫人の実家とはうまくいっていなかったらしいからである。(13) ともあれ，いささか紋切り型の表現を使うなら，市民としての生活をここで彼は本格的に開始したのである。

それは『ブッデンブローク家の人々』と『トーニオ・クレーガー』を書いた彼の，恐らくは必然的な道程だった。

註

Ⅶ.

（1） 処女長篇『或る家庭にて』の発行部数は，Edith Zenker の „Heinrich-Mann-Bibliographie. Werke.“（Berlin（Aufbau）1967）にも明記されていないが，千部程度の少部数であったと見て間違いあるまい。

初期短篇集２冊の発行部数については，GW版第16巻（短篇集１）のあとがき

に記述がある。それによると，1897年に出た第一短篇集は初版が二千部，1903年に若干の変更を加えた第2版三千部が出，合計五千部が印刷されたが，1910年現在で約二千四百部が売れ残っていたという（GW，Bd.16，S.623ff.）。また1898年に出た第二短篇集は初版千部が刷られただけで終わった（Ibid，S.623）。

（2） H. Mann: Im Schlaraffenland. (FS) S.435

（3） H. Mann: Diana. (FS) S.293f.

（4） Ralf Schlichtling: Heinrich Mann und Friedrich Nietzsche. Frankfurt am Main(P. Lang) 1984 S.465

ちなみに，1954年に生まれ70年代後半に学生時代を過ごした研究者によるこの本は，70年代西ドイツの偏向した知的雰囲気を示して余すところがない。マン兄弟を扱った箇所での著者の論調は一方的なハインリヒへの加担とトーマスの断罪であり，アジ演説のような趣きがある。80年代になって Marcel Reich-Ranicki がハインリヒ・マンを讃美する西ドイツのゲルマニストを論難し，東ドイツの学者の方が客観的だと述べたのもむべなるかなと思わせる。この点については Reich-Ranicki の „Thomas Mann und die Seinen“ への私の書評（「東北ドイツ文学研究」第33号，1989年）及び山口裕『ハインリヒ・マンの文学』への私の書評（「ドイツ文学」93号，1994年）を参照されたい。

（5） H. Mann: Briefe an Karl Lemke und Klaus Pinkus. S.45

（6） TMBRR,I. S.49 トーマス・マンのブランデス宛て書簡。また Hans Bürgin: Das Werk Thomas Manns. 1959. Akademie Verlag Berlin S.19

（7） 辻昶・丸岡高弘『ヴィクトル・ユゴー』 東京（清水書院） 1981年 34－39頁

（8） 厳密に言うとイタリア離れは1899年にはすでに起こっていたと Mendelssohn は見る。ノート3に見られるイタリア批判の記述によって（本論考連載第2回を見よ）。また同年9月にトーマスは『トーニオ・クレーガー』構想のもととなった北方旅行をして，詐欺師と間違えられる体験をしている。

Mendelssohn: Der Zauberer. I. S.359－364

（9） H. Lehnert: Thomas-Mann-Forschung. S.22f.

(10) Mendelssohn, a.a.O. S.507f.

(11) H. Mann: Die Jagd nach Liebe. GW,S.61 CL,S.78

(12) H. Mann: Briefe an Ludwig Ewers. Berlin(Aufbau) 1980 S.410

(13) THBW, S.3

Ⅷ.

(1) THBW, S.41

(2) THBW, S.41ff.

(3) THBW, S.47ff.

(4) THBW, S.52

(5) THBW, S.53ff.

(6) Mendelssohn: Der Zauberer. I. S.600

(7) Julia Mann: Ich spreche so gern mit meinen Kindern. Berlin(Aufbau) 1991 S.131

(8) TMBRR, I. S.58ff.

(9) Mendelssohn, a.a.O. S.608

(10) Thomas Mann: Briefe an Otto Grautoff 1894−1901 und Ida Boy-Ed 1903−1928. Frankfurt am Main(Fischer) 1975 S.150f.

(11) THBW, S.56

(12) THBW, S.351

なお，ハインリヒとカルラ名義の贈物は，実際は上の妹ユーリア（愛称ルーラ）によって調達されたらしい。母ユーリアはハインリヒに結婚式に出るよう依頼した手紙の中でそう書いている。J. Mann, a.a.O. S.138

また，母は結婚式後ハインリヒへ宛てた手紙で，お前たちの贈物であるコーヒーセットは魅力的で手に取りたくなるような品で，日常生活で楽しんで使えるでしょう，と述べている。J. Mann, a.a.O. S.143

(13) Golo Mann: Erinnerungen und Gedanken. Eine Jugend in Deutschland. Frankfurt am Main(Fischer) 1986 S.20, S.212f.

付 録

前回のトーマスのハインリヒ宛書簡に引き続き，ハインリヒのトーマス宛返信下書きを訳出する。最初の説明と下書きの（ ）内は底本編者による説明である。

ハインリヒのトーマス宛て書簡下書き

上記書簡の裏面に，ハインリヒ・マンは複写用鉛筆で返信の下書きをかろうじて読み取れる程度に残している。清書に利用した文章は縦線で消している。この下書きを以下に再現する。

記号の意味するところは，

[…] ハインリヒ・マンが抹消した箇所

{…} ハインリヒ・マンが後で追加した箇所

（用紙の上半分）

1)のために。奇抜なものにも幾分か深い理由がある。フォン・アイゼンマンとの最終シーン。クロードはそれをそう見るのだ。生への軽蔑。

II 性的なものは恐ろしいほど単純なこと。マットハッカー。私はロマンティックなだけで，デモーニッシュなものを理解しない。ナナ。偉大さ。私には偉大さが欠けている。主人公は弱すぎるし，女たちもナナではない，彼女らは何も意味しない，彼女らは帝国の腐敗を体現しているのではない。

肉体的出来事に関する秘密。「騙し」。

モラル——精神。なぜそんなに精神が必要なのか。エッセイばかりを書くほどに。

I 内面的なものは避けて読んでいるらしい。ところがあの本のことを考えると，内面的なものだけが私の目には浮かぶ。まるでクロードとウーテだけが登場するかのように。あの本では他のものには何も興味がない。他のものはすべて事件の羅列であり，[半ばだけ非現実であり，] おふざけであり，荒っぽく，汚らしく，半ばだけ現実であり，まったく不十分だ。クロード [のように孤独な人間は] {はこうした出来事で自分の感情をすり減らす} 彼は私がそれらを見ているのと同じように見ている。不毛で非現実的なのは他の人間たちで，彼ではないし，彼の病気でもない。彼の孤独がどれほど強調されていることか，

そして

我々はまったく同じ理想を抱いているのだ。お前は北方の健康に憧れ，私は南方の健康に憧れている。私はすでに『トーニオ・クレーガー』の時に言ったはずだ。平凡さは青い目の主にだけあるのではないと。

『愛の狩猟』で「平凡」というが繰り返し使われているのは，もしかすると一種の返答だったのか。［だが今となってはもう憶えていない。実際のところはただ，私が事件を綴る者だということだ。］

（用紙の下半分）

我々の間には程度の違いがある。私の方がジプシー的な芸術家気質を多分に持っているので，抗うことができない。そして私の方がずっと病気にかかっている。私の方がロマンス系で，異質で，寄辺なき存在だ。

むしろ私に欠けているのは安らぎであり，推敲のための時間だ。

私は不安なのだ。やめたら，自分はおしまいなのだと。* それから金だ。私が効果について語っている時は，もっぱら金のことを考えている。喝采を浴びることそれ自体を問題にするような，［単に］虚栄心で一杯の連中を莫迦にする十全な権利［を持つ］が私にはあると言いたい。私にとっては，沢山の人間の出す不特定な喧噪は背後にある，（［ミス］ミセス・ブラウニング[1]）どうでもいい。名声なるものは私に関するあまねく広まった誤解だということは，分かりすぎるくらい分かっている。誰に対してか知らないままに人が拍手をするということも。クロードとマットハッカーがこの点について言っていること，私は本気でそれを書いたのだ！　私は自分が一人だということを知っている，そしてもし仮に

2　ウーテ以外は万事がどうでもいいということ！　彼女以外のものを関心

1）（訳註）イギリスの女流詩人。詩人ロバート・ブラウニングと結婚してからはフィレンツェに住んだ。

をもってきちんと真面目に描いたら，スタイルを損なっただろう。だから私は結局あの作品のスタイルは正しかったと思う。だがだからといって，作品{「そのもの}が［まったく］不適切なものだという可能性がないわけではない。もしかするとクロードのようなキャラクターによって世界像を伝えてはならないのかも知れない。この像は余りに病み，荒廃し，耐え難いものとなっている。だがそれは，言葉を換えて言えば，私が書くのをやめることになってしまうだろう。

＊健康のための鍛錬なら，『ブッデンブローク家の人々』が出る以前からやっている。